



# かがや

2019年8月1日発行  
公益財団法人 大川美術館  
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



野田英夫《ボキプシー》1937年頃

## ことば 122

作家の世界観の深度が造形的骨格と相俟って、混然として花束の如く美しく表現された時、吾々は一つの絵画に何度も足を運ばずに居られないのである。

野田英夫（『みづゑ』1938年2月号）

## 【鼎談記録】「群馬の近代美術を支えた企業人 — 井上房一郎と大川栄二」

2019年 4月27日(土)

於 大川美術館 レクチャー室

鼎談者：熊倉浩靖（高崎商科大学特任教授）

山鹿英助（郷土史家、山鹿銃砲火薬店店主）

奈良彰一（郷土史家、書肆画廊奈良書店店主）

開館30周年記念事業の一環として、当館の成り立ちとコレクション、創立者・大川栄二（1924-2008）の足跡を振り返るとともに、大川美術館の活動を群馬県全体からとらえこれからの大川美術館について考える鼎談を開催した。

鼎談では、自身の信念に基づき文化支援を全うした井上房一郎（1898-1993）のもとで長年仕事をしてこられた日本古代史研究がご専門の熊倉浩靖氏の進行のもと、井上と大川の橋渡し役となり、当館設立時にその現場に立ち合った山鹿英助氏、当館開館当初より企画展をはじめとする多くの活動に深く関わられてこられた奈良彰一氏にお話をうかがった。井上、大川の側近として奔走されてこられた方々ゆえ、鼎談は自然、熱のこもるものとなった。二人が、つねにパブリックな視点を持ち続け、地道に築いた人脈を基盤に、文化の発展、発信に果たした功績、市民との交友のなかで模索され続けた一地方都市における文化振興のあり様を見つめなおす契機にもなったとおもう。

これからの大川美術館が、創立者の思いを原点としつついかにこの桐生という街で生きてゆくべきか、その可能性を示唆しつつ鼎談は締めくくられた。本欄では2回にわたりこの鼎談の記録を掲載する。ここに改めて、熊倉浩靖氏山鹿英助氏、奈良彰一氏に謝意を表します。



鼎談者の紹介の様子

（向かって左から田中館長、熊倉氏、山鹿氏、奈良氏）

### 【大川美術館の設立の頃】

熊倉／今回の鼎談は「群馬の近代美術を支えた企業人—井上房一郎と大川栄二」となっていますがここは大川美術館ですし、ちょうど今月が大川美術館30周年の節目ですので、大川さんがなぜこの美術館を作ったかという、その気持ちを奈良さんが紐解いて下さり、山鹿さんが接着剤で大川さんと井上さんのお話をつないでくださるので、奈良さん、山鹿さん、私という順番でお話をしようとおもいます。

奈良／私が大川さんのことを知ったのは、東京にいた頃で、すでに著名なコレクターでした。私が昭和45年、桐生に帰ってきてから、小さなコレクターの会や版画の頒布会などを始めた頃、大川さんの存在が耳に入ってきました。昭和61年、桐生に美術館をつくるということが正式に新聞発表になりました。それであの大川さんであることがわかり、お会いし手紙を書きました。本当に実現するのであれば、「私なりの勝手な運動をさせてもらいます」といった手紙でした。それが後の大川美術館市民の会に発展していきます。大川さんから「望外の喜びである」という返事をいただいてその後頻繁に会うようになりました。大川美術館を建設する現場の工事もほとんど毎日見てきましたし、莞さん（建築家・松本竣介次男）に依頼する前の図面もある程度見ていました。この三年間はおそらく、大川さんにとって産みの苦しみであると同時に産みの喜びであったのだと思います。あれほど毎日が充実し、怒りに満ち悲しみにも満ち、喜びにも満ちたという毎日が変化に富んだ準備期間の三年間はなかったんじゃないか、と傍にいた人間として思っております。

熊倉／大川さんは美術館を桐生に作ろうと思われた。桐生に作るにあたり、奈良さんに相談があったのではなく、奈良さんはそれを聞いて、ある意味、勝手に支援に入った。それで市民の方々は動いていった。どうやってそのように市民の皆さんをそこへ巻き込んでいったのですか。

奈良／大川さんの話を聴いて、このまま放っておくわけにはいかない、というのがありました。一方で、あるマスコミを通して叩かれ闘ったということがありました。志を持って、いいことをやろうと思っても、人は疑うということ、それをいちいち否定していくのは、何倍もの力があるということを側にいて感じました。大川さんの気持ちを十分理解し、何人もの友達、先輩や後輩が桐生倶楽部に集まって市民運動を始めようということで、のち大川美術館と一緒に手伝ってくれた松井さんや朝倉さんやら、いろんな方が集まって運動を始めました。私の力というより、大川さんの本当の気持ちが分かった市民が動いていったと思っています。

熊倉／ある意味、今日の鼎談の核心ですね。だからこの館はそれ以降きっちり持っているんですね。

**奈良**／大川さんはじっくり考え確信をもった。いい美術館ができる、と。まずは玉川近代美術館の設立というものが先にありました。名誉町民の徳生忠常さんが資金を出し、大川さんがコレクションを提供して出来たいい美術館です。その成功が大川さんの中で確認され自信となったと思います。そして大川美術館の建設に着手したのです。この建物は西友（スーパーマーケット）の寮を増築した莞さんの設計です。これを実によく生かしながら作りあげた。既存の建物に窓がたくさんあるということや、小さな部屋をうまく生かしながら、美術館らしからぬ一部屋一部屋が家庭の中にある、部屋のようなそんな美術館を目指しているということ。安らぎがありアットホームな美術館を当然目的としている。大川さんのその意を汲んだ莞さんの設計は見事でした。

**熊倉**／心が心で繋がっていったことは、とても大きいことでしたね。そのなかで山鹿さんが入られて、この建物を井上さんが作るようになったわけですが、そのあたりは山鹿さんがすべてを知っておられます。

#### 【井上房一郎と大川栄二の出会い】

**山鹿**／私は非常に特殊な商売でございまして、銃砲火薬、爆薬を扱っています。それがどういうご縁でしょうか、井上先生は最後に高崎の岩鼻の群馬の森に美術館を建てられることが決定しました。その隣にある日本化薬から私は年中爆薬を運んでいました。県立美術館が着工してから、井上先生のキャデラックに乗せられ数度、見せてもらいました。まず井上先生から大川美術館のことが話題になったときに、井上工業として、なんとかやりたいのだ、と仰っていました。ところが井上先生は、「どうやらちゃんとした美術館ではなくてどうも西友という寮を改修して作るのだ」と仰られました。ご期待に沿えるようなものではないかもしれませんが、ということで一応、私としましては大川さんを井上さんに紹介しました。その時に井上工業の今までの実績なども話しました。その後、しばらく経ってから大川さんから「俺はあのじいさんに頼んだよ」と聞きまして、私はああ良かったな、と思いました。そんなことで大川さんと井上さんを引き合わせたというのは私です。

**熊倉**／大川さんと井上さんとは、30近く歳が違ってますよね。僕もお会いした時に立ち会ったので

すが、実は話が合わないんですよ。たぶん山鹿さんは、美術を愛しきちんとコレクションし、それを公のものとするために美術館にするんだという志、井上さんのなさってきたことと大川さんとは話が合うだろうから、さぞ話が進むだろうと思っていたことでしょう。それが実際にはあまり話をしないんですよね。大川さんとは話をしないで帰ってしまわれましたね。多分その間で山鹿さんは心配なさっていたと思う。僕も実際心配していました。奈良さんの顔は浮かぶし、とても不安だったのが実情です。それで期せずして、西友の寮を改築することで逆に井上さんと大川さんというかなり個性の違う二人が群馬の美術とか、美術を公共のものにして市民みんなの共有財産にするという話につながって、そして今日こうして皆で話ができている。不思議なことです。爆薬でモノが爆発するのではなくて、繋がったのです。

**奈良**／井上さんと大川さんは、喧嘩はしたのかな。

**熊倉**／いや、喧嘩まで至っていないんですよ。

**奈良**／大川さんは、喧嘩した人ほど仲良くなる。ある程度親しくなると意見の食い違いというものには必ず起こるものですが、自分の信念をいつも曲げずに相手にぶつけました。そういう意味では井上先生はあまり人に誤解をされる人ではなかったのでは？大川さんほど誤解を受ける人はいないと思います。

**熊倉**／そのへんは折衝に当たられていて山鹿さんでしょうか。

**山鹿**／井上先生はそのへんは上手に逃げた。喧嘩はいっさいやらない方ですから。

**熊倉**／さきほど奈良さんは、井上さんは誤解を受けない、と仰いましたが、いやあの人こそ誤解をずっと受け続けた人はいません。最たるものはタウト（ブルーノ・タウト：建築家・昭和8年ドイツより亡命）との交流のなかです。群馬県の嘱託という建前でタウトのお世話をしていたことがありますが、その後ずいぶんやりきれない思いを井上さんは持ちました。以来誤解を生むようなことはしない。あるいは誤解であっても弁明しないということはどうもしたらしい。たぶん大川さんと会ったときに、気持ちは繋がるけれど、表面やりあうと違う意味で色々誤解を招くんじゃないか、と。自分が静かにしていればいいと思われたのだと思います。そのかわり、この建築の工事に